

第1講 難聴の子どもはどうして英語学習に行き詰るのか？ - その機序を探る

最近「機序」という言葉を知りました。からくり、とか、仕組み、とかいう意味です。どうして難聴の子どもは「英語が苦手」に陥るのか、この機序を最初に探ります。

1 英語教育と一口に言うけれど・・・コミュニカティブ・アプローチについて

中学校までの義務教育の中で必ず英語を学習しますし、高校や大学で英語を学習した人も相当多数です。しかし、最初に親の世代の皆さんに申し上げたいのが、英語学習の基本的な方法が、1990年あたりを境に大きく変わっているということなのです。私は1970年に中学に入学し I have a book. から英語の学習を始めました。教科書によっては This is a pen. から始まっていますが、方法論の基礎は一緒です。私の世代が受けた英語教育は、「文法を踏まえて、
10 教材を易から難へ配列する」「文型を学習したら、単語を入れ替えて繰り返し練習する」というものでした。

現在はこのような方法ではなく、コミュニケーション重視の方法論（コミュニカティブ・アプローチ）です。そこでは「伝えあう」ことが重視されますので、多くの場合、学習の最初は Nice to meet you. (はじめまして) です。さらに、Classroom English と呼んで、授業中の指示の多くを英語で行うことで、英語に慣れ親しませようとしています。文法も無視するわけではないのですが、説明も手短に行い、あとは「習うより慣れる」とばかり、とにかく使ってみよう、というやり方が多く行われています。

また、英語の学習は「聞く・話す・読む・書く」の4つをバランスよく、と言われます。しかし、近年は「聞く・話す」という音声言語への強い傾斜が見られます。そこでは「わからなくてもいいから聞こえたことをまねて、何かを伝えてみる」という活動が重視されます。以前
20 のような、指にタコができるほど書きまくる学習ではなく、様々なゲーム・やり取りを通して、本当に楽しく英語の時間に活動します。文字の学習はある程度の学習が進んでからはじまります。それまでは音声言語一本です。以前は、こういう音声言語だけの学習が中1の最初1カ月だったのですが、小学校に外国語活動が導入にされてから、それが小学校に降りてきました。そして、この学習では基本的には文字を使わないのです。

ここまで書いてくれば、もうお分かりでしょう。こういう学習が難聴の子どもにとっては本当に大変であることが。

2 学習プロセスからの分析

もう少し整理してみましょう。右ページに、英語の学習サイクルを書き出してみました。イン
30 プットというのは、先生が授業中に話した英語の表現、これを生徒は耳にします。そして、「あ、なんか言ったな」と分かる、これが の「気づき」です。それだけでは学習になりません。気づいた内容を、これまでの既存の知識と照合しながらその内容や構造などを理解します。これが の「理解」です。Give me water. と聞いたら「あ、water は水だし、何か欲しい時には give と言うんだったな」と思いたす。あるいは、give をここで初めて習うんだったら